

猪 1 3 山の神と狩人 = = = 猪・鹿・狸より

狩人が猪を撃った時は、その場で。頸のイカリ毛を抜いて山の神に捧げるのが、古くからの作法であった。その方法はまず手頃の木を切って皮を剥ぎ、尖を割いて串を作り、それに毛を挿んで立てるのである。別にその場で臓腑を抜いて祀ることもあったが、猪の場合はごく稀であった。その折の唱え言などはもうなかった。ただ実直な狩人には、人に物言う如くに、よう猪をお授け下された。と唱えるものもあったと言う。

山の神を祀ることは、狩の前にも行なった。幾日山を歩いても、さらに獲物に遭遇せぬ時は、いったん家に帰って、さらに出直したのである。而して山口に地を選んで、手近の常緑木の小枝を二、三折敷いて、その上に酒を灌ぎかけて祀った。山の神様猪をシナシて下されと祈ったと言うが、猪狩りに限ったことではなかった。シナシて下されは狩人の言葉で、獲物に巡り合せ給えの意であった。あるいはまた獲物を前にして、祀ることもあった。多くは巨大な古猪などの場合で、狩の懸念される折であった。方法も前と変わりなく、残りの酒を酌み交して出かけたのである。

山の神が女性であるとは、もっぱら言うたことで、山の木の葉一枚も惜しまれると言うたが、あるいは一眼一本脚の大漢であるとも言った。現に鳳来寺山中で、遭遇したのもあったと聞いたが、久しい前でしかも詳しいことは伝わらない。そうかと思うと、同じ山中で永年狩を渡世にしていた丸山某は、数里四方に亘ると言う森林中をほとんど至らぬ隈なく跋涉して、人跡稀な山中に夜を明かしたことも、幾度かはかり知れぬが、ただの一度も遭遇せぬからは、昔の人の嘘だと断言した。しかも獲物を取り匿されることだけはあったと言う。何者の所為か判らぬが、確かに斃したに拘らず、谷を渡って近づいて見るともう影も形もなかった。なかには程経てから山犬などに荒らされているのを見出すこともある。そうかと思うと幾度も搜索して、確かになかったはずの処に、はや半分腐っているのを、後に発見することもあった。いずれにしても目の迷いなどは信じられぬ、山の不思議は確かにあった。それで結局は山の神に匿されたとしておいたと言うた。同じ山の西麓、玖老勢(くろぜ)村の某の狩人は、斃した猪の行方を索(もと)めめぐんで、諦めて還りかけると、誰やら後で呼んだそうである。振り返って見ると全身毛だらけの大男が立っていた。もはや遁げるに遁げられずそこに立ち竦んでいると、大男は傍らへ寄って何やら問いかける。よく聴いてみると、しきりに何処のものだと尋ねるのだそうである。



そうしてだんだん話すうち、実は三〇年前に家出した、同じ村の豆腐屋某の倅であると語ったと言う。その狩人にはもちろんそのことは思い出せなんだと言う。どうして暮らしているかと訊いてみると、初めは木の実を拾ったり、木のアマ皮を剥いで飢えを凌いだが、今では何でも捕って食うと言う。そうしているうち、いつか体中に毛が生えてしまったと、語ったそうである。最後に別れる時、俺に遇ったことは、決して喋ってくれるなと言うたが、その狩人が臨終のおりに、傍らのものに語ったと言う。その時猪の行方はどうだったか、その男と関係あるように思われるのに、そのことについては聴かれなんだ。

自分に語ったのは、今年七十幾つになる老媪だった。子供の頃、母から聞いたそうであるが、恐ろしいと思って、以来誰にも話さなんだと言うた。